

現代文学の進退
小島信夫

河出書房新社

現代文学の進退 ©1970

初版印刷 昭和四十五年五月十五日

初版発行 昭和四十五年五月二十日

定価 八八〇円

著者 こじまのぶ
小島信夫

装幀者 飯島啓司

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三一六
電話東京二九二局三七一一（大代表） 振替東京一〇八〇二

印刷 株式会社文弘社

製本 岸田製本紙工業株式会社

製本は入念に致しておりますが
万一、乱丁・落丁・汚損のごさいます時は
最寄りの書店・本社にてお取替え致します

目次

現代文学論

小説は通じ得るか 9

劇と小説について 33

小説と演劇についてのノート 33

何を書くか、ということ 43

仮面について 47

言葉のよごれについて 51

私の考える「新しさ」ということ 62

作家のディレンマ 72

現代と諷刺文学 79

自由な新しさということ 91

愚劣さについて―私の文学― 103

作家論

永遠の弟子―草平と漱石についてのノート― 121

徳田秋聲 146

夏目漱石 163

私と漱石 163

女の空おそろしさ 167

国木田独歩 171

大岡昇平 190

江藤 淳 199

『江藤淳著作集6』について 199

江藤淳『崩壊からの創造』について 206

梅崎春生 211

記憶 211

私の文学の四辺

処女作のころ 221

昭和二十一、二年ごろに何をしていたか 223

一つのセンテンスと次のセンテンス 227

「たんぼの女」など 232

なぜテレビのそばを離れないか 236

この車の乗手たち 244

教師と学生 249

真実をどう語ったらよいのか 255

堅くて重い「私」 260

複雑ということ 266

実験住宅の悲しみ―私の家― 269

父に似る 275

わが運動部生活 281

文芸時評

一九六八年文学総論 287

文芸時評 295

あとがき 389

現代文学の進退

現代文學論

小説は通じ得るか

先だって若い劇作家、清水邦夫の『真情あふるる軽薄さ』という芝居を観た。またあの男の芝居のことか、といわれるかも知らないが、どうか終りまで読んでもらいたい。

このタイトルは私には耳ざわりであるが仕方がない。芝居が始まると数人の男女が通路を歩いてきて舞台の下に立ち、大きな長い箱をかついだ男がふりむいたり何か隣りの男に話しかける度に、二度三度箱がひとの頭を打つので、口論となる。幕があくと、舞台いっぱいエンエンと何かを待っている、何十人という男や女が並んでいる。さっきの口論していた数人は、その列の最後尾につく。まだ口論が続くうち、箱をかついだ若者が舞台の真中へやってきて、列の男や女に気にさわることを叫びかける。最初は顔をそむけてこの不様な目ざわりな若者を無視しようとしているけれども、ひとりひとり巻きこまれて行く。

若者は列の連中を射ったりするが、それでは死なない。彼はその銃で機動隊に射たれて死ぬし、列の連中は機動隊に追払われ、観客もその機動隊にとりかこまれるという仕組みになっている。

芝居を観ていると、口を動かし自分もいっしょに顔を動かし同じセリフをくりかえし喋舌るのは、どういうわけか分らないが、席にすわっていないながら、席にはいないのであろう。が、素朴な感応が

自分の身体、筋肉を通して行われていることは確かであるが、そのことに恥じていることも事実だ。そうではなくて恥じているときに私は人物のセリフや動きの真似をしているのかもしれない。いずれにしても、密室で小説世界にふけている自分がうけている反応である。

清水氏のこの芝居では、私は列の連中が巻きこまれるところのヤリトリを面白く後半からあと機動隊が出てくる最後になって観客さえ巻きこんで不安にさらすところで終るのはショックだが、けっきょく陳腐の感をいだいた。前に観た「狂人なおもて往生をとぐ」の場合も、私が新鮮に感じたのは、第一、第二幕であることは、『海』の創刊(劇と小説について、「言葉のよこれについて」に書いた通りであるが、第一、幕二幕とは、狂人の息子が自分の家を淫売宿と思いこみ、息子の子になつて家族が協力しようとする」と、「家庭ごっこをするな」とどなるようなふうなところ、そのバリエーションである。

「真情あふるる軽薄さ」とはいったい何のことなのか、このタイトルだけでは、見当もつかないが、今の若者が文章に書いたり、それこそビラに書いたり、大人たちを野次ったりするときの、そして大江健三郎氏あたりから始まって流行してきたうえ、アジビラの文句にも通じるような文句であることは分る。事実これは、若者が列の中のひとりに向つて、あるいはマコトシヤカな顔付きをして列に並び、最少限度の道德を守ろうとしている普通の人間のいったりしたりすることに對しての言葉である。

観客の一人である私もまたこの列の中の一人みたいなものであることはいうまでもない。私がこうして色々な反応をかんじながら、(あるときは若者を怒り、あるときは列の中の人たちを怒り)表面はほとんど動じたそぶりを見せずにこうして坐っているということ、そのことが、「真情あふ

るる輕薄さ」だというふうにいわれることも分っている。私は勿論そう思い、理不尽とも思い、そう思う自分を打消しながら、そこにそうして動かないでいる。くりかえすが、私も列の中の一人である。そうして私が徐々に感じてきているのは、私の中の小説的なものが、劇によって攻撃をかけられているということである。私が密室の中へ、とりつくろった自分の中へ拠点を見つけ立て直すとするのを、ひきずり出されようとしていることである。

私は列の中のひとりである。こうして引きずり出されることを認めたらうで、引きずり出したものが殺されてしまうというのではなくて、殺されもしないかもしれないが、とにかく、このように、ひきずり出し、ひき出されるという関係というものを、もう一回、私の中で受けとめた上で一つの私の世界を作ること、それがたぶん、小説というものであらう、とこう考える。

というのは、「真情あふるる輕薄さ」は、殺され機動隊にとりかこまれたあの、若者の叫びであったというのは何人かにアピールするかもしれないが、私はほんとの劇の強さとは思わない。劇は前の部分にあり、その部分からこのように発展することが、すなわち劇を陳腐なものにする。陳腐なものの、応援を頼むことによって、一時間のこの芝居が辛うじて成立しているが、大半はつけ足しである。だがつけ足しが小説で表現されたとしたら、一層陳腐になり、たぶんせいぜい芝居のマネという印象をあたえるだけとなる。いかにしても、この部分は、ほんとの意味では、芝居にも小説にもならない。

それにしても、若い清水邦夫の二つの芝居以上に、訴えてくるものは、ほとんど小説では、この一年の間に見たことはない。このことは、文学（この言葉の広い狭いは別としても漠然と使った場合であっても）ゼンたいを考えさせるものをもっている。

それでは、うけとめて、一つの世界を作るときの「私」とは、いったい何なのか、その世界とは、どのようなものなのか、ということを考えるに当って、最近読んだ『季刊芸術』第十一号の、秋山駿氏の『簡単な生活』を紹介して見よう。

「私はもう十年も前にベルグソンの言葉を読んで感動したことがある。生存とは、何かしら絶対的に、ひたすら自己を拡大し、深化しようとする或る意思の運動なのである。しかし、私はもう、こういう考え方を捨てようと思う」という。そして「人間だけが、蟻すらも為しあたぬ簡単な、単調な生のあり方というものを、容易にもち得るものだ」と私は思う」と述べ、「私はこの現代の社会の性質が成立させている多くの人間的事実を否認したいと思う。すなわち私は、自分に親があるということ否認したい。自分の子供を欲するということ否認したい。家庭というものが行軍の途中にある仮りの露営という以上のものであることを否認したい」といい続ける。

自然になりたい、石になりたい、とかねてからの考えを語りつづける秋山氏の文章は、秋山氏が前に『内部の人間』で書いたイポリットの思想であるが、幸福なのか、不幸なのか、肺病にかかったイポリットが自分の死後にまで残るはずの壁をうらやむように、肺病にもなっていない人間が自己の権利も放棄するかわりに、自分を放つといってくれ、おれは係りたくない、そこに転がっているだけでいいと、石のマネをしたがるということである。たしかに不当といっているほど、家庭ももう少し大きく社会も、いわゆる生活というものが、四十歳になる秋山氏にその複雑さの故に呪われている。

簡単でありたいと願うばかりか、石になりたいと願うこの心情にぶつけられたときほど、複雑さがうろたえることはない。秋山氏のいう通り、多くの人の生活は複雑さを認めた上で成立っている。

からである。そのとき對話を失うことになる。對話を失うくらい悲しいものはない。それだけが本来の人間の願いで、そのために、人間はどんな卑しいこともしかねないのだから。

なぜ、こんなに喋舌りたがるのだろうか、自分は。自分が生存していることを、社会の中の一員であることを、石ではないことを、置いてけぼりを食いたくないということを訴えているのだ。そのとき人間は忽ち複雑になる。複雑だからといって、何があるのだ。だから簡単になる。こうして簡単な生活を語るために、秋山氏は何十枚と複雑に語りつづけ、その複雑さに私は感心させられる。この一編のエッセイが、すなわち、上等なおしゃべりなのである。

秋山氏は、物語をマネるだけの生活、という。いや生活が認識できるのは、普通物語としてだけかもしれない。そんな認識なんか生活の実態ではない。だから小説がどうして面白かるう、という。これが氏のかねてからの持論で、別に珍しい意見ではない。

簡単であることは難かしい作業だが、それでも簡単でありたいと思うのは、自分を疑い社会を疑う秋山氏の心の苦しい発明なのである。

秋山氏の呪いをこめた簡単な生活への願いは、若い清水氏の作品の若者のこの世の行列への言いがかりとよく似ている。この世は複雑だよ、というものの中に、瞞着のにおいをかいでいる。どこにもかしこにも、逆にこの簡単さへの欲求がきこえている。この簡単さの見せる立姿は、相手にとっては暴力に見える。個人が簡単になりたいと思うように、社会もまた簡単になりたいと思う。互いに暴力と見え、正式の顔と顔は武装してあらわれる。

この二人の人は、ひとりとは独創的な芝居という手段を借り、一人は巧みな文体をもったエッセイの手段を借り、アイロニイを道連れにしているので、簡単な生活が、どんなに簡単ではないか、

ということをちゃんと書いたことにもなる。

それでいて観客や読者の私としては、矢面に立った感じをうける。それがねらいの一部でないわけはなく、今日より、私は簡単になりたいと思うと背中を見せてしまわれることに、私はおいて行かれたような奇妙なあせりをかんじゃないわけではない。歩行器をさげた人たちがいいがかりをつけられて、口を歪め、遂に怒号する、つまり戦いを宣言するのを見ると、私は自分の姿を見る思いがする。ありがたいことに簡単な生活を望むと叫ぶ若者はさんざん毒づいたあげく、殺されてしまう。毒づき方が激しいので、観客は毒づかれたものにも同情することは出来る。作者の計算は行き届いているが、芝居という形式によって、そのところは一層効果的に表現される。だが結局は複雑なものは糾弾されていることは間違いない。小説をかくという意味で、五十をこえた男、子供をもった普通の男、沈黙を守りつづけ、辛抱よく心の奥底に思いをとどめておくことが出来ない男として、何とかして、「私」というものをもちこたえようとする。

秋山氏はエッセイという武器で打ってくる。そうして、芝居はそこにある姿を即物的に描くということ、エッセイは迷いを告白することによって、どちらも人間というような不たしかなものの造型に固執しないことによって、何かあるべき姿に近づいているように見える。

「私」というものは、複雑なるものをもちこたえるだけでなく、どうやら、複雑なものと、簡単なものとの二つをもちこたえなければ、『真情あふるる軽薄さ』の芝居の観客席に坐っていることは出来ないように思われる。

一見すると温厚な清水氏は、幼い頃、新潟県の市へやってきたサーカスの行列に加わることが出来ず、中味ごとテントが焼けてしまえばよいと思った、とパンフレットに書いている。秋山氏は